

インタビュー：

木下大輔（学びの森 教室長／サタデー・パフェ担当）

インタビュー .. 木下大輔 (学びの森教室長)
聞き手: 奥山理子・阪本結 (みずのき美術館)

奥山.. 木下さんは、3組のアーティストのそれぞれ6回のワークショップに立ち会っていただきました。途中、HANDOVER FARMでは大きな出来事がありましたけど、サタデー・パフェ全体を通して、当初やってみたいと思った事業のかたちと、今感じておられることとの違いなどをお聞かせいただけますか。

木下.. そうですね。いっぱい色んなことを考えたから話そうかかっていう感じなんですけど。一番大きい出来事はやっぱりHANDOVER FARMさんのことです。あの時、丹下さんが叱ってくれたおかげで、学びの森として子どもたちと関わるうえで足りない部分があったことを知れました。

それは、「自由」であることと「自分勝手」が表裏一体だということです。これまで僕は生徒たちに、「学びの森を一緒につくろう」というふうに投げかけていたけど、なぜそうしたいか、その大前提になる部分を伝えきれていなかったことに気がつきました。僕の振る舞いや生徒との関係性、僕の見せる表情とか言動のひとつひとつを改めて振り返る機会になったし、それをスタッフと共有することもできました。子どもたちの学びを支えるスタッフとして、学びの森で大事にしていきたいことは何かを改めて考えるきっかけを与えてくれた出来事になったと思います。

また、生徒たちにもそれは伝わったような気がします。生徒とも、「どうしようか、これから」、「こういうことが起きた後にどうなっていけたらいいんやろう」「大事なことってなんやろう」というのを一人一人とじっくり話すことができました。最近、子どもたちがよく考えて行動してくれているなって思うことも増えました。これまでは、僕がどれくらいまで生徒に踏み込んで良いのか悩むことも多かったんですけど、やっぱり踏み込んでいかなあかんとときがあるんだと思います。そういうことができる信頼関係を、日頃の関わりの中でどうやったら作れるか、今まで以上に真剣に考えるようになりました。

奥山.. ワークショップ当日でなくても良いのですが、今回のテーマに繋がっているような、印象に残っている光景はありますか？

木下.. (しばらく考えたあと) フリースクールの生徒たちとは毎日、それも朝から夕方まで顔を合わせるので、いろんなことを喋る機会が多いんですよ。でも、生徒同士は特定の子としか喋らなかつたり、とくに放課後等デイサービスで夕方からやってくる子どもたちとの交流は少なかつた。そういう中で、土曜日にこうやって集まる機会を重ねるうちに、生徒同士が横のつながりを大事にしているようになって感じられる姿を見かけた時はおもしろいなって。学びの森は特にいろんな地域から来ているので、学校が休みの日にわざわざ会えない。連絡先を交換したとしても、そこからやりとりをしつづけないといけないとか。みんなそういうことに苦手意識があつたり、僕が思う「普通にやりとりしたらいいやん」が、彼ら彼女らにとってハードルが高いこともあると思います。それが、「サタデー・パフェ」を理由に、土曜日に集まるっていうのは良いこともあるのかなと。そういう土曜日の過ごし方が、割と今までに無かつたことなのかなと。回を重ねるごとに仲良くなつていく過程を見られたのが、印象的なことのひとつです。

奥山.. 確かに、普段教室の中で会う友達と別の場所で待ち合わせて会うっていうだけでもちよつと新鮮ですもんね。

木下.. うん。だから、こっちの思い描いたこととは違つたかもしれないですけど、生徒たちの中に残っているものがきつとあるんだと思いました。

もう一つ印象に残つたこととしては、放課後等デイサービスに通うある生徒とのやり取りです。その子に対しては反省も大きいっていうか、その子のことを理解した気だった自分がいて、使い古されたような言葉でしかその子のことを語ることでできていなかった。

放課後等デイサービスって「個別支援計画」というのを書くんですよ。ここを利用するあなたに我々はこういう支援の計画を立てますよ、っていうのを出さないといけないんですけど、半端なこと書けへんっていつも思うんですね。子どもがどうなつていったら良いかの計画を、こっちが勝手に考えて書くってすごく

違和感があったんです。でもやらないといけない大事な仕事の一つなので、僕なりに本人の意見をちゃんと聞き取れるよう話し合ったうえで書きたいなっていう気持ちがありました。先日、ちょうどその子について計画書を作成する際に、「僕らがこんな計画書を書いてたん知ってた？」って訊いてみたんです。大抵は親御さんにしか伝えないし、形式的にはハンコを押したら終わりなので、子どもが目にするのは滅多にありません。でも、「こんなん書いてんねんで」って見せてみた。そして、一年後どうなっていたい？とか、半年後どうしてたら幸せやろか？っていうことを訊いてみたら、「ちょっと焦ってる」って言うんです。

「（勉強についていけないことに）正直ちょっと焦ってる。でもめんどくさいし。」って。その子は将来、飼育員になりたいんですって。生き物を育てる人になりたいと。それやったら、生き物を育てるときに、餌を何グラムって測ったりするのに算数必要ちゃう？今は九九が覚えきれていないけど、九九できたら計算しやすくなるで、とか、色々提案したんです。

でも、「簡単な生き物やったら大丈夫やから」とか屁理屈を言ったので、「自分の得意な生き物はいけど苦手な生き物は飼育しませんって言われたら、俺やったら、君にベツト預けたくなくなるかもしれへんけどなあ」って言うてみたんです。このやり取りが正解かはわからないけど、その時は、その子が向き合いたいと思ってるところに「応援するよ」っていうメッセージが伝えたくて、加えて、「でもこれは、やらなあかんのちゃうの？」っていうところまで伝えることができました。本人は、「めんどくさい！」って言いながらも、「めんどくさいことも、ここなら安心してできる、ここから向き合える」と、もしかしたら思ってくれてるかもしれへんなっていう兆しを感じました。こうしたやり取りができるようになったのも、今回のワークショップを通して生徒との関係性が変わったからだと思います。

阪本…冒頭に木下さんは、「一緒に作る」っておっしゃっていたじゃないですか。「学びの森と一緒に作る」っていうことだったり、「アーティストと一緒に作る」って、どういふことなんやろうって考えながら聞いていたんですけど、今のエピソードこそ、まさに「一緒に作る」を表してるなって思いました。丹下さんにインタビューをさせていただいたときに、「ワークショップで一緒に来た子どもた

ちと、先生と生徒、サービスを受ける人と提供する人っていう関係ではなくて、一緒に悩んだり、つまずいたり、いいものを一緒に作ったりっていうことをしたかったんだ」っていう話をされていたのを思い出しました。さっきの木下さんと生徒さんとのやりとりは、「その子の人生と一緒に作っていく」っていう共同作業なのかなって、勝手ながら理解しました。そのことと丹下さんの話されたことがオーバーラップして聞こえたのは、やり方が違うだけで学びの森の現場で木下さんと生徒さんとの間で行われていることも、ワークショップの中でアーティストと参加者との間で行われていることも、「一緒に作る」っていう意味では変わらないのかなって思っただけ。このワークショップをきっかけに、生徒さんたちとそういう話ができるようになったっていうのも、すごく分かるような気がしました。特に今回サタデーパフェに参加してくださったアーティストたちっていうのが、同じような関わり方を期待されていたように見えて、「先生」と呼ばれないように、なんとなく友達のように一緒に考えて、ちょっとずつ、一個ずつ一緒に答えを見出して行く方法を、参加者と横に並んで悩みたいっていう人が集まっていたように思えて。それは何か意味があったんじゃないかなと思いました。

